

空



2014・10

SORA 57号

千葉 原 友 子

螢火の記憶を辿りゆくやうに
撥ね出しの野菜を食べて暑に耐ふる
飛び石の見えぬて昏るる魂迎へ
検査衣の四角をくづし盆のあと
灰神楽立たせ夕立の駈け抜くる

大阪 田 岡 千 章

十葉の花や業平座せし石
夾竹桃潮入川をポンポン船
鳴焼や日に一合の土鍋飯
出目金に真昼の秘密覗かるる
夏暖簾招福猫は袴で

熊本 松 田 明 子

祭笛この辻までは江戸の内
鎮魂の碑に雨しづく広島忌
海軍の父の青春ハンモック
若き日を語らず父母の終戦日
またの世も親子でゐたし魂迎

糸島 小 林 朱 夏

初西瓜叩かれ弾かれ売られけり
捺印のはみだしてをり稲光
小さきも採つて苦瓜棚崩す
役目終へ服脱がさるる案山子かな
魯田に首から歩く鳥がをり

東京 今井春生

老人と言はれたくなし遠花火

月光や砂の落ちきる砂時計

蟬の声聞こえぬ朝となつてをり

荒川や天に蠍座地に西瓜

文机の螺鈿細工や秋澄めり

東京 山田正子

縁日の戸板に並ぶ蝮酒

花火師の半被の屋号白く浮く

あの橋は人待つところ立葵

ラジオから昭和の歌や胡桃割る

つまらぬ日はじき飛ばそう鳳仙花

東京 古川夏子

無患子やおかつば頭の昔あり

白南風や終の住処は雲近し

潮満ちし浮棧橋や野分月

解体のビルの全貌夏の月

朝曇り瀬戸の藻塩で歯を磨く



空作品抄
柴田佐知子抽出

鶏頭の追ひつめられし色となる

秋さびし指人形を額かせ

ロザリオを握りて眠る星月夜

朝顔の摘心悔いてをりにけり

人間にまへやうしろや更衣

祈ること多きながさきただ灼くる

薪能影が大きく先を行く

濃き色の花より崩れ大花野

家系図は死者の名ばかり稲の花

高倉 和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部 早苗

だいじみどり

野 上 杏

秋 千 晴

宮井知英

あさなが捷



蟬しぐれ血縁黒く集ひけり

芋の葉や少し傾ぐは顔のやう

爽かや玄界灘は竿の先

踊の輪見様見真似で加はれり

大木に鎖のごとく蟻の列

白木槿アルプスせまる無人駅

涼しさや名城にして無彩色

昼寢覚すでに晩年来てをりぬ

年ごとに凶太くなりぬ花カンナ

薄切りの梨を僅かに臥す母は

金魚飢ゑ水面沸騰してゐたる

飛び石の見えゐて昏る魂迎へ

夏暖簾招福猫は袴で

役目終へ服脱がさるる案山子かな

老人と言はれたくなし遠花火

ラジオから昭和の歌や胡桃割る

田代貞枝

井浦美佐子

吉村摂護

苑実耶

亀井紀子

野畑さゆり

鳳蛮華

戸栗末廣

樋口みのぶ

山内碧

栗原京子

原友子

田岡千章

小林朱夏

今井春生

山田正子

無患子やおかつぱ頭の昔あり
夕刊のあとの軒先つばめの子
白桃を水の重さと思ひけり
よろづ屋の小暗き土間に囿鮎
秋風や男が遺す喉仏

安国論一卷掲げ像灼くる

手の動き踊るやうなり藪蚊打つ

萍を分けて怪し気なる背鱗

末の子はいつも真中夕涼み

右右右前前左西瓜割

問ひ返す会話ふえたり蚯蚓鳴く

母の名のまだ朱き墓洗ひけり

空つぽになりたくレース編んでゐる

放水車一斉に蟬はじき出す

蚊一匹骨を鳴らして夫は追ふ

底紅や稜線どこも母に似る

古川夏子

戸栗末廣

天谷翔子

松田明子

小林朱夏

柴田志津子

織田高暢

押田裕見子

秋千晴

吉田菫

野畑さゆり

えとう樹里

青木朋子

石川叔子

白水良子

田中とし江



気に留めてほしくて揺るる百日紅

さらさらの砂場に遊ぶ秋はじめ

うち解けて涼風みぞおちまで渡る

留守番は仏に任せ踊りけり

薔薇の棘指に一夜を明かしけり

台風や磯の香強き交差点

ひぐらしや木立の空気動かさず

佛壇に増えゆく写真桃匂ふ

できぬこと母にまた増え夕あきつ

手のとどく高さに蜻蛉蹤き来る

定年近き息子の白髪秋深し

根ごと木の流れてきたる秋夕焼

伸び上がる蓮の影おく夕日かな

幼子の笑顔のごときさくらんぼ

農道は牛馬優先豊の秋
楼門を押されてくぐる放生会

仲里 奈央

遠山 のり子

乾 有杏

橋本 知笑

小川 涼

田邊 豊子

清水 量子

酒井 みち子

横田 敬子

森 俊人

井上 義郎

林 徹也

山口 弘子

ふじの 茜

小谷 一夫

森 真二

空作品評

柴田佐知子

薪能影が大きく先を行く

秋 千晴

鶏頭の追ひつめられし色となる

高倉 和子

鮮やかな色とごつんとした独特の存在感を有する鶏頭。色は朱・赤・黄などあるが、この句の鶏頭は赤であろう。日が経つと、鶏頭の花の首のあたりから、黒い種が顎の中で育つてゆく。鮮やかな朱色が濃くなり黒味を帯びてくる変化が、〈追ひつめられし色〉と見事な言語感覚で捉えられている。最後は立ったまま黒く枯れ、片手でも簡単に引き抜ける。

人間にまへやうしろや更衣

だいじみどり

普通、自分を中心に置いて、前後左右を認識する。例えば自分の前に山、後ろに川といった具合だ。しかしこの句、人間を一個の物体として突き放して見たような、あつけらかんとした響きがあり面白い。

投句された五句は薪能だけで構成されている。掲句は演者が篝火の明かりの中を進んで来るところ。〈影が大きく先を行く〉という具体的な描写によって臨場感のある作品となった。〈化身出て炎荒ぶる薪能〉へ土蜘蛛の糸の降りくる薪能もそれぞれの場面が活写され迫力がある。

家系図は死者の名ばかり稲の花

あさなが捷

代々残されてきた家系図は、確かにこの通りだ。誰もが知っていることを、すんなりと作品化されており驚く。当たり前のことも、切り口を変えらることで新しさが生まれる。季語「稲の花」の配合もよい。大地のひろがり、農耕民族の時空をさかのぼるような奥行きをもたらししている。

爽かや玄界灘は竿の先

吉村 撰護

釣竿の先という小さな一点と、その先の玄界灘。読むものの視線も釣竿から一気に晴れ渡った玄界灘へと導かれる。単純にして豪快。

年ごとに凶太くなりぬ花カンナ

樋口みのぶ

〈凶太さ〉とは縁遠そうな繊細な神経を持つみのぶさんの作品とは驚いた。少々のことでは動じなくなつたのは、老いてゆくことによつて与えられた恩寵なのかもしれない。結構なことだ。繊細さに加え、このように自分を突き放して詠む凶太さを我が物としたならば、俳句はぐんとスケールアップするだろう。歳をとることも面白い。

金魚飢ゑ水面沸騰してゐたる

栗原 京子

金魚を飼っていたころを思い出した。金魚鉢に餌をまくと、一斉に水面に浮いてきて口を突きあげ餌を奪い合う。〈沸騰してゐたる〉は、まさにこの状態の的確な表現だ。

飛び石の見えるて昏る魂迎へ

原 友子

座五に置かれた〈魂迎へ〉によつて、静かな光景に微妙な色合いが加わる。作者の鋭敏な感覚による季語の選定である。白く暮れ残っている飛び石が、彼の世と此の世との通り路のように思えてくる。

白桃を水の重さと思ひけり

天谷 翔子

てのひらにのせた白桃を〈水の重さ〉と思うとは、なんと瑞々しい感性であろう。具体的な描出は無いのに、白桃の質感が実感できる。神経を研ぎ澄まして作句されているのであろう。

萍を分けて怪し気なる背鰭

押田裕見子

萍が覆い尽くすように水面に浮生しているのであろう。このような池沼は得体のしれないものが潜んでいそうで、気持ちのいいものではない。何でもない魚をも〈怪し気〉と思わせる萍が、うまく詠みこまれている。

そのほか触れたかった作品の一部をあげる。

よろづ屋の小暗き土間に囀

松田 明子

右右前前左西瓜割

吉田 葦

空つぼになりたくレース編んでゐる

青木 朋子

放水車一斉に蟬はじき出す

石川 叔子

底紅や稜線どこも母に似る

田中とし江

気に留めてほしくて揺るる百日紅

仲里 奈央

できぬこと母にまた増え夕あきつ

横田 敬子

空集

柴田佐知子選



別れ話混じり聞こゆる瀧の音

機上よりヨットの群の花のごと

天皇の植樹の桑の実を食みぬ

白桃を水の重さと思ひけり

もたれあふことなく揺れて花菖蒲

熊本 松田明子

よろづ屋の小暗き土間に囀

恐れ入るほど散り敷ける凌霄花

由緒書余さず読みて夏祓

筋書のすぐに読めたる夏芝居

新松子一打に響く能座敷

糸島 小林朱夏

秋風や男が遺す喉仏

新造船秋の雲連れ戻りけり

職人の道具の手入れ秋澄めり

打ち水に自転車漕ぐ足揚げて行く

安国論一卷掲げ像灼くる

福岡 柴田志津子

軍艦のやうな鯉寄る木下闇

一の倉二の倉つなぐ茂りかな

三伏や松はまつ赤な脂を噴き

滝壺の水の押し合ふひととこ

清水飲む獣のやうに膝を折り

夕刊のあとの軒先つばめの子

涼しくて細き足首手首かな

京都 天谷翔子

蜘蛛と生れ搦めとりたき人のあり

夏草や数をたのみの肝試し

鮎落ちて瀬音やさしくなりにけり

岩山を猿の飛び交ふ晩夏かな

高西風や土地の名多き巡視船

水無月の青空へ帆を浮かべたし 大阪 織田高暢

梅雨の傘地球の雨を地へこぼす

蚕豆や子規の横顔一粒づつ

点いて消え点いてしばらく誘蛾燈

手の動き踊るやうなり藪蚊打つ

萍を分けて怪し気なる背鰭 北邊 押田裕見子

怪談の蚊帳を恐れし頃の闇

たてかけし箒ごと壁灼けてをり

血の騒ぐ女をねらふ蚊の羽音

夏掛を海とし幼き子と潜る

まつ先に井戸水褒むる帰省の子 粕屋 秋 千晴

末の子はいつも真中夕涼み

ビアガーデン下戸もジョッキを持たさるる

鰯雲玄界灘を網羅せり

荷揚げして薬玉のごと鰯降る

荒れ狂ふおろちに山車のきしみけり 粕屋 吉田 葎

幾たびも声を合はせて山車曲る

右右前前左西瓜割

掘りたての山芋並ぶ蚤の市

暗がりに力借りたる闇魔王

正面に甲斐駒ヶ岳秋涼し 山梨 野畑さゆり

盆供養つつがなきことのみを告げ

はらからの欠くることなく涼新た

秋あかね天領の道ひろびると

問ひ返す会話ふえたり蚯蚓鳴く

白南風やウクレレの音は尾を曳かず 千葉 原 友子